

慶應義塾大学教養研究センター主催

第一回 社会・地域連携セミナー

大学教育と社会・地域連携のあり方を考える

—— 教養研究センターのこれまでの取組の意義と課題——

2011 年 7 月 20 日(水) 14:00～17:00

慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2 階 大会議室にて

第1回「社会・地域連携セミナー」

「大学教育と社会・地域連携のあり方を考える」

— 教養研究センターのこれまでの取組の意義と課題 —

大学の教育に還元する社会・地域連携のあり方を探っています。
これまでの取り組みをご紹介しますとともに、課題と今後の教育プログラム構築をめざします。皆様のご意見をお聞かせください。ご参加をお待ちしております。

日時:2011年7月20日(水) 14:00～17:00

場所:日吉キャンパス来往舎(大会議室)

対象:教職員・学生、申込み:不要

司会: 種村和史 (商学部教授)

コメンテーター:牛島利明(商学部教授)

パネラー:

◆「三田の家」 熊倉敬聡(理工学部教授)

2006年9月に設立し、大学教員・学生有志等と三田商店街振興組合が共同で運営する地域連携活動の拠点の一つで、大学と地域の協働による21世紀的学生街の創出を目指している。

◆「庄内セミナー」 羽田 功 (経済学部教授)

2008年から開催されている、鶴岡タウンキャンパスを中心とした庄内地方の住民、諸機関などとの交流・連携を通じ、地元の歴史や文化の教養体験、課題発見から問題解決にいたる成果発信型のセミナーである。

◆「カドベヤ」 横山千晶 (法学部教授)

2009年から横浜市中区に教育GPの社会連携プロジェクトの活動拠点として設置して、地元の社会起業家やNPO法人と協働で運営し、隣接する街を大きなテキストとして学生が交流し学び、新たなフィールドワークや社会連携のモデルを醸造している。

◆「日吉エイジ」 長田 進 (経済学部准教授)

2003年から学生・教員有志と、日吉商店街協同組合、地域の小学校などと地域活性化のためのイベント企画・運営をとおして、多様な経験と価値観をもつ人々と関わり、相互のつながりを広げ深めている。

主催:慶應義塾大学教養研究センター
問合せ:toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

はじめに

商学部教授 種村 和史

教養研究センターでは、さまざまな社会・地域連携のプロジェクトが行われています。三田の家・カドベヤ・庄内セミナー・HAPP・日吉キャンパス公開講座・サイエンス・カフェなど、多様な活動を行い豊かな実績を挙げ、様々な地域との連携を構築してきました。本センターは、社会・地域連携のノウハウと実績、見識を持つメンバーを所員として多数擁しております。

また日吉キャンパスでは、教養研究センター以外にも、例えばヒヨシエイジ、また今春教員有志によってボランティアベースで立ち上がり、この夏に本格的に活動を展開する慶應義塾南三陸支援プロジェクトなど多くの活動が行われています。これらの活動の中には、日吉キャンパスから離れた地域で行われているものも複数ありますが、いずれも日吉の教員がその運営を担当し、その成果を日吉キャンパスでの教育に生かしているという意味で、日吉キャンパスの活動ということが出来ます。

以上のように日吉キャンパスは、社会・地域連携の分野において慶應義塾の中で先導的な役割を担っています。今後、慶應義塾が本来実現すべき社会・地域連携活動に乗り出すに当たって、日吉キャンパスおよび教養研究センターが中核の一つになることは間違いないと思います。

一方で、本センターの社会・地域連携活動が多くの課題を抱えていることも事実です。個別の活動は積極的に行われ充実した成果をあげておりますが、それぞれの活動を貫き、教養研究センターのミッションである教養教育の充実に貢献させるための総合的なビジョンをいまだに持っていません。また、もう少し合理的・有機的に活動を組織し運営できるかもしれないところが、個々の所員任せになってしまっています。それぞれの活動の経験が十分に共有されていないために、同じような問題にぶつかっているのに、本来ならばもうすこし合理的に問題を処理できたはずのところを、個別のプロジェクトごとでの問題解決を余儀なくされ、貴重な時間と労力を費やしてしまっています。さらに、他キャンパスで行われている活動との連携がないこと、膨大な実務的負担のために本センターの他の重要な活動遂行に支障

が出ていることなども問題点として指摘できます。

これは、慶應義塾全体の問題としても考えることができます。現在のところ、社会・地域連携の分野において、慶應義塾大学は本来有している知の蓄積と潜在能力に比して、十分な展開をしているとは言い難いところがあります。また、複数の地にキャンパスを持ち、多くの学部・研究所を有するというアドバンテージを生かすための社会・地域連携を総合的に推進する部門がありません。そのために、各地区、各部門でそれぞれ単独に道を模索しているのが現状です。それぞれの地区、それぞれの組織で展開されている社会・地域連携活動は、義塾の他の運営部門と協力することによって、より充実した活動を展開することができるでしょう。そのような協力体制を確立することによって、慶應義塾が社会・地域に向けて学術的貢献を果たすとともに、高い能力を持つ義塾の学生の意欲を受けとめ、より豊かな学びの経験の機会を提供できるでしょう。そのために、教養研究センターの社会・地域連携の取り組みは、一つのモデルになり得るのではないのでしょうか。

このような考え方に立って、本センターは社会・地域と連携した教養教育のビジョンを作り上げ、具体的な教育プログラムを構築することを中長期的課題として位置づけました。本センターで行われている社会・地域と連携したプロジェクトを全体的に把握し、その教育的意義を考察したいと思います。また、各活動の実態を分析し、それぞれの特徴を知ると同時にそれぞれが抱える問題点をも洗い出し、特長を生かしつつ問題点をスムーズに解決していくために、教養研究センターとしてどのような体制を取るべきか、また義塾の関係部門とどのような連携・協力体制を構築していくべきかを考えていきたいと思います。またそれと同時に、他キャンパスで展開されている社会・地域連携の活動を包括的に把握し、それらとの協力も模索して行きたいと思います。この取り組みを通じて、日吉の学生を主たる対象とした社会・地域に開かれた学びの総合的ビジョンと具体的な教育プログラムを作り上げていくことができるのではないかと期待します。

大学が行う社会連携・地域連携には二つの側面があります。一つは、大学に蓄積された知を社会・地域に積極的に発信し、社会・地域が抱える諸問題の解決のために貢献するという側面です。もう一つは、大学で展開する「学びの場」を大学キャンパスという空間で完結させず、キャンパスを超えて拡張させ、積極的に社会・地域と連携し現実社会の諸事象と切り結ぶことによって、既存の大学教育カリキュラムでは実現できない新たな知の獲得を目指すという側面です。両者ともこれからの慶應義塾にとって重要な意義を持つことは言うまでもありません。また、両者は判然と分けられるものではなく、同じ一つの活動の中に二つの性格が渾然一体として存在し、両者が有機的に結びつくことによって、はじめて初期の目的を遂げられるということもあると思います。

ただし、先に提起した問題の解決を目指し、教養研究センターの社会・地域連携の意義を考え、総合プランを立てるという作業過程では、社会・地域貢献という側面と「学びの場」の拡張という側面とをあえて分けて考えた方が便利だと思います。そこで、まずは教養研究センターの設立趣旨に則り、「学びの場」の拡張の側面にスポットを当てて考えてみたいと思います。

本年度は、年間4回の公開セミナーを計画しています。第1回は、教養研究センターのプロジェクトを中心として、日吉キャンパスの教員が参画して展開されている社会・地域連携の取り組みについて情報交換をします。第2回は、SFCにおいて行われている社会・地域連携の取り組みを紹介していただきます。第3回は、三田キャンパスにおいて行われている社会・地域連携の取り組みを紹介していただきます。以上を承けて、第4回のセミナーでは、今後教養研究センターは、社会・地域連携の活動をどのように行うべきか、また慶應義塾全体としてどのように社会・地域連携の体制を整えていくべきかを考えていきたいと思います。

第1回目の今回は、とりあえず足下を見ようということで、現在日吉キャンパスで行われている社会・地域連携のプロジェクトについて理解を共有し、それぞれ直面する問題点を報告してもらい、それを解決し活動を発展



種村 和史氏

させるために、教養研究センターとして何をすればいいかを考えていきたいと思っています。

パネリストとして四人の先生方にお集まりいただきました。教養研究センターのプロジェクトとして、三田の家・カドベヤ・庄内セミナーの三つのプロジェクトを主催している先生方にそれぞれの活動をご報告いただきます。また、教養研究センターとして直接運営に関わっているわけではありませんが、日吉キャンパスにおける地域連携の活動として長年の経験を有するヒヨシエイジについても、長田先生よりご報告いただきます。

本日は、社会・地域連携室から事務長の宮尾さんと職員の椎名さんにも会場にお越しいただいています。日吉における社会・地域連携の実態を理解し、どうしたら活動をより発展させることができるか、お互いに知恵を絞っていけたらと思います。

庄内セミナー

担当者：羽田 功（経済学部教授）

庄内セミナーは、2008年に鶴岡セミナーとして開催し、2009年度からは庄内セミナーとして名称を変更し開催され、2010年度には東北公益文科大学を共催校として開催した。

この庄内セミナーは日本海・庄内平野・鳥海山・出羽三山に囲まれた「生命」の宝庫たる庄内をフィールドとして、さまざまな角度から「生命」を学び、研究する機会を学生たちに提供することで、生きる力の基盤となる教養力を身につけるための新たな学びの形・学びの場を生み出すことを趣旨としている。また、鶴岡タウンキャンパスを中心とした庄内地方の住民、諸機関などとの交流・連携を通じ、地元の歴史や文化の教養体験、課題発見から問題解決にいたる成果発信型のセミナーである。

日常とは異なる環境の中に身を置き、未知のものに出会うことで学びのフィールドを広げることも教養教育には欠かせない要素であると考え、地元の方々に一般公開することでさまざまな世代にまたがる交流の機会を提供し、豊かな自然と文化、歴史に恵まれた庄内をフィールドに、存分に心と体と頭を使いつくすプログラムを学生たちに体験させることが庄内セミナーの目的である。

庄内セミナー

<http://keio-up.net/shseminar/>



羽田 功氏

教養研究センター第一回「社会・地域連携セミナー」

庄内セミナーについて

羽田 功（経済学部）

2011年7月20日（水）
日吉キャンパス来往舎

庄内セミナーの趣旨

1. 慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）の新たな「学び」の場とする。
2. 東北公益文科大学と「知」の連携を行う。
3. 「学び」のフィールドとしての庄内を掘り起こす。

⇒日本海・庄内平野・鳥海山・出羽三山に囲まれた「生命」の宝庫たる庄内をフィールドとして、さまざまな角度から「生命」を学び、研究する機会を学生たちに提供することで、生きる力の基盤となる教養力を身につけるための新たな学びの形・学びの場を生み出すことを趣旨・目的とする。

教養力とは・・・

1. 自立力＝自分自身を確かなものとして立ち上げる力
2. 自律力＝自立した自分を客観的・批評的に眺め、必要なときには修正・改善を加えることで不断に成長することを可能とする力
3. 社交力＝冷静な自己評価を通して自らのなすべきことを的確に把握し、これに取り組むために積極的に他者や未知なものに関心を持ち、これとつながり、協働して問題に立ち向かうことのできる力

庄内セミナーの目的

庄内をフィールドとして・・・

1. 「人とつながる・人をつなげる」
2. 「土地とつながる・土地をつなげる」
3. 「知とつながる・知をつなげる」

ことを目的として、「心と体と頭」をフルに使ったセミナーを体験し、最終的にはそこから生まれた成果を広く社会に向けて発信していく。



鶴岡タウンキャンパス (TTCK)



庄内セミナーのテーマ

◇総合テーマ：『庄内に学ぶ「生命(いのち)」ー心と体と頭とー』

日本海・庄内平野・鳥海山・出羽三山が織り成す庄内という小宇宙とその歴史の中で育まれてきた「生命」の在り様を学びつつ、慶應義塾において進められている「生命」に関わる多様な研究・教育の成果をも取り入れることで、「生命」を総合的に考えることを趣旨としたテーマ。

◇基調テーマ：「見る・知る・表現するー行動の教養学入門」

◇年度テーマ：

- ・2008年度：『生命の源ー死を想い、生きることを考える』(即身仏・羽黒修験)
- ・2009年度：『<庄内を知る・1>激動の時代を生き抜くー松ヶ岡開墾場に学ぶ「生命(いのち)」のつながり』(藩校「致道館」と徂徠学・松ヶ岡開墾場)
- ・2010年度：『<庄内を知る・2>芭蕉が見た庄内の「生命(いのち)」』(「おくの細道」)



講演(一般公開)

講義



セミナーの構成(1)

1. プレ企画

- ・事前説明会
- ・庄内関連企画ー映画上映・講演会(一般公開)

2. 合宿セミナー

- ・3泊4日(鶴岡・酒田：学生1万円・一般3万円)
- ・基調講演(一般公開)
- ・テーマに関連する講義
- ・フィールドアクティビティ(グループワーク)
- ・中間報告会(一般公開)

3. 最終報告会

- ・11月中旬・日吉キャンパス(一般公開)

4. 報告書作成



フィールドアクティビティ





フィールドアクティビティ



セミナーの構成(2)

セミナー関連企画

1. 生協総代会でのブース展示
2. 学生健保「朝食サービス」への庄内米提供
3. 庄内フェア開催
 - ・庄内ランチ提供(生協食堂)
 - ・庄内物産販売(生協購買部)
 - ・庄内関連書籍展示販売(生協書籍部)
4. 特別企画 (一般公開)
 - ・「命の実感プログラム:土の土方と水滴の時間」(鶴岡TTCK)
 - ・図書館展示『慶應義塾と庄内:「ハートの教育者」田中一貞』(慶應義塾図書館 初代館長・庄内出身)(日吉)
 - ・日吉フェスタ庄内ブース出店(日吉)
 - ・鶴渡川原人形展示・絵付け体験・関連講演会(日吉)
 - ・庄内セミナー俳句コンテスト(日吉)



報告会



土方異像



庄内



関連企画ポスター



【課題と展望】

教養研究センターでは2008年度から山形県鶴岡市にある慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を拠点として、東北公益文科大学の協力・共催のもとで庄内セミナー（初年度のみ鶴岡セミナー）を実施してきた。趣旨は、庄内をフィールドとして地元の歴史や文化、社会からさまざまなテーマを掘り起し、両大学の学生が「心と体と頭」をフルに活用したグループワークを通してこれらのテーマを掘り下げながら庄内の未来を展望することにある。いわゆる、問題発見から始まり、その解決を目指す発信型の教養セミナーである。具体的には羽黒修験・即身仏・藩校「致道館」と徂徠学・松が岡開墾場・芭蕉「おくのほそ道」を取り上げつつ、その現代的な意味と問題を読み取り、最終的には公開プレゼンテーション・報告書作成を行ってきた。また、このセミナーにはTTCKを新たな「学びの場」として活用する実験としての意味もある。（紙幅の関係から関連企画については省略する）

セミナーは一定以上の成果を挙げてきたと思うが、同時に以下のようないくつかの問題も浮き彫りとなった。

- ① 学生の積極的な参加が少ない（教員スタッフによるリクルートが中心）
- ② 実費のみの徴収なので経費がかかる（コストパフォーマンスが悪い）
- ③ セミナー主催者側の関心・テーマと地元のセミナーへの期待の間に落差がある（たとえば地元は即効的な経済効果や地域振興策を期待している）
- ④ 参加者層が限定されている（社会人や地元住民の参加が難しい）
- ⑤ 若手教員スタッフが少なく、職員スタッフの負担が大きい

これらの問題は、構造的にはそれぞれが絡み合う部分が多いため、すぐに解決できるわけではないが、何よりも教養研究センターがこうしたカリキュラム外の試みを「社会・地域連携」活動の一環としてどのように位置づけ、発展させていくのか、根本的なところから見直しを行うと共に、地元との連携のあり方をいかにしてより有機的に構築していくのかを真摯に議論していく必要があると思われる。

三田の家

担当者：熊倉 敬聡（理工学部教授）

「三田の家」プロジェクトは、創立150年記念未来先導基金の助成を受け、慶應義塾大学の教員と学生有志や卒業生などが三田商店街振興組合と共同で運営し、三田の地域社会に新たな文化・交流の萌芽をもたらそうと2006年度より活動してきたプロジェクトである。本プロジェクトは、長期的には、慶應義塾と港区の共同事業である「芝の家」プロジェクトとも連携しつつ、大学と地域の共同による21世紀的学生街の創出を目指すプロジェクトである。活動内容は非常に多岐に渡るが、主な活動としては、通常の教室では実現しがたい実験的授業・ワークショップの企画・実施、外国人留学生との交流、三田商店街ならびに地域住民との共同企画・実施、学生が主体となって企画する講演会・展覧会・コンサート・情報発信イベントなどの実施、活動等の書籍の出版を行っている。三田の家は“もう一つの”学びの場であり、通常のキャンパスでは起こりえない出会い・出来事が日常的に起こる場である。

三田の家

<http://mita.inter-c.org/>



熊倉 敬聡氏

大学地域連携の現場からの報告

慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

社会・地域連携セミナー、慶應義塾大学日吉キャンパス
熊倉敬聡、坂倉杏介

大学地域連携の現場からの報告 慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

三田の家とは？

- ・大学近くの一軒家を改装した「家」
- ・2006年9月～、教員・学生有志、地元商店街との共同で運営
- ・キッチンとリビングからなる「もう一つの学び場」



SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

大学地域連携の現場からの報告 慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

「三田の家」と「芝の家」



SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

大学地域連携の現場からの報告 慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

「場」づくりのアプローチ

マスター制

- ・週一日ずつ、時間を提供して運営
- ・マスターの個性が自然ににじみ出て、日ごとの多様性生まれる

月曜 手塚千鶴子（日本語研究センター／国際交流）ほか
火曜 塩原良和（法学部／多文化共生）
水曜 武山政直（経済学部／都市とIT技術）
木曜 熊倉敬聡（理工学部／美術評論、文化実践）
坂倉杏介（Gsec研究所／地域コミュニティ）＋ベベ
金曜 岡原正幸（文学部／感情社会学）
日曜 上田謙太郎（東京藝術大学大学院／映像）

SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

大学地域連携の現場からの報告 慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

三田の家 慶應義塾大学／三田の家LLP／三田商店街振興組合

2006～



大学内／大学と地域の「あいだ」の「場」

SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

大学地域連携の現場からの報告 慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

三田の家のアクティビティ

活動内容

- ・オープンするだけ
マスターがいるだけ、目的があってもなくても居合わせることができる、食事会、コモンミール
- ・公開授業やワークショップ
ゼミや授業、ワークショップ、レクチャー、「三田商店街を歩き歩く」、Processing講習会など
- ・「小さい」まちづくり
「学生CMコンテスト」「インターネット放送局／街頭テレビ実験」「商店街イベントデザイン企画」など
- ・「小さい」国際交流
留学生の交流の場、映画上映会、観劇・コラージュワークショップ、アジアキッチンなど
- ・展覧会、コンサート、パフォーマンス
「みたでかんたんーびれ」「イシワタマリ屋」「森下真樹パフォーマンス」など

SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10



大学地域連携の現場からの報告 慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

うたの住む家 障害の有無を問わず参加できる「うた」のワークショップ



SAKAKURA Iyosuke | Keio University | 2011/06/10

大学地域連携の現場からの報告 慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

芝の家

港区芝地区総合支所／慶應義塾大学／三田の家

2008年10月～



港区／慶應義塾大学の連携によるコミュニティ形成の拠点

SAKAKURA Iyosuke | Keio University | 2011/06/10

大学地域連携の現場からの報告 慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

三田の家のアクティビティ

大学地域連携シンポジウム 慶應義塾大学三田キャンパス周辺での大学地域連携の取り組み



SAKAKURA Iyosuke | Keio University | 2011/06/10

大学地域連携の現場からの報告 慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

芝の家とは？

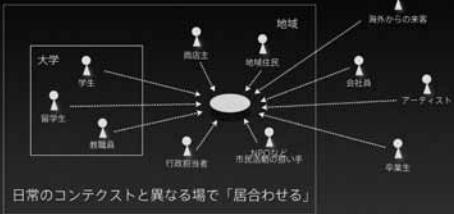
- ・港区によるコミュニティ形成事業の拠点
- ・慶應義塾大学、三田の家LLPとの共同事業
- ・近所付き合いの再創造を通じた、安心で暮らしやすいコミュニティづくり



大学地域連携の現場からの報告 慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

「場」づくりのアプローチ

大学の近傍にあるメリット



→ 普段は出会わない文化的背景の異なる人たちが居合わせる
→ 大学周辺地域を豊かな学習フィールドへかえるきっかけ

SAKAKURA Iyosuke | Keio University | 2011/06/10

大学地域連携の現場からの報告 慶應義塾大学の二つの試み「三田の家」「芝の家」の取り組み

芝の家とは？

- ・誰でも、いつきてもいいしいつ帰ってもいい、いたいようにいられる「居場所」
- ・近隣の子どもからお年寄りまで集まる、コミュニティ活動の拠点
- ・高校生から70代まで、学生や近隣住民（約30名）が協働して運営



SAKAKURA Iyosuke | Keio University | 2011/06/10

港区と慶應義塾の包括協定

- ・2008年10月、港区と慶應義塾の包括協定
- ・三田の家の教員・学生を中心に、港区との協同事業がスタート



SAKAKURA Iyosuke | Keio University | 2011/06/10

近隣の人の関心、特技を生かしたイベント



SAKAKURA Iyosuke | Keio University | 2011/06/10

ふだんの芝の家

- ・月曜～土曜まで、週6日間オープン。
- ・月・火・木曜日は、コミュニティ喫茶「月火木」



SAKAKURA Iyosuke | Keio University | 2011/06/10

オープン日数と利用者層

- ・週6日間オープン
- ・月・火・木曜日は、コミュニティ喫茶「月火木」
- ・水・金・土曜日は、子どものオープンスペース（遊び場）
- ・来場者層はさまざま
- ・小学生やそのお母さんお父さん
- ・乳幼児と親（託児はしていないので同伴利用）
- ・中学生、高校生
- ・近隣の大人、お年寄り
- ・近隣で働く会社員
- ・大学生、留学生
- ・地域外の関心を持つ人、見学、研修、取材など

SAKAKURA Iyosuke | Keio University | 2011/06/10

ふだんの芝の家

- ・月曜～土曜まで、週6日間オープン。
- ・水・金・土曜日は、子どものオープンスペース（遊び場）



SAKAKURA Iyosuke | Keio University | 2011/06/10

2010年度来場者数

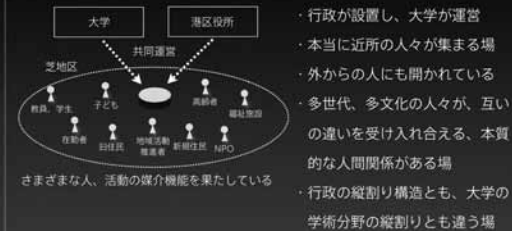
- ・2010年4月～2011年3月（年間284日開室）
- ・利用者数：9,753人（月間700人～1000人）
- ・一日平均：34.3人
- ・来場者の割合：

子ども	：34.9%	（乳幼児～中学生）
大人	：51.8%	（中学生以上）
お年寄り	：13.4%	（65歳以上）

SAKAKURA Iyosuke | Keio University | 2011/06/10

「芝の家」の特徴

地域の様々な世代、分野の人々が、いたいようにいられる空間



SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

芝の家からはじまる「小さな地域活動」

芝の家コミュニティ菜園プロジェクト

- ・学生と地域住民の連携から発展、鉢植えの「里親」は20軒以上に
- ・環境緑化、多世代の交流、地域の見守り活動への展開



文部科学省「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム
慶應義塾大学「身体知教育を通して行う教養活動育成」事業

SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

芝の家からはじまる「小さな地域活動」

いろはにほへと芝まつり



いろはにほへと芝まつり

SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

芝の家からはじまる「小さな地域活動」

えんす〜ぶ（緑を育むすこやかプロジェクト）

- ・地域のヘルスケアをテーマに、医学・薬学生や若い医師などを中心にした活動
- ・ハーブ喫茶、いのちのワークショップなど、近隣幼稚園や福祉施設と連携



SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

芝の家からはじまる「小さな地域活動」

いろはにほへと芝まつり



SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

芝の家からはじまる「小さな地域活動」

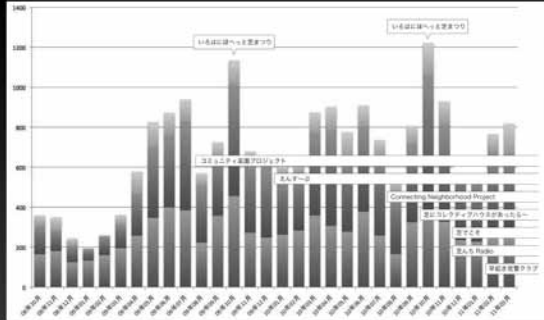
つながるご近所プロジェクト Connecting Neighborhood Project

- ・高齢化社会のご近所づきあいを支援するメディアのデザインリサーチ
- ・Jan Lindenbergとの共同で、シニア層の住民参加型ワークショップを実施



SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

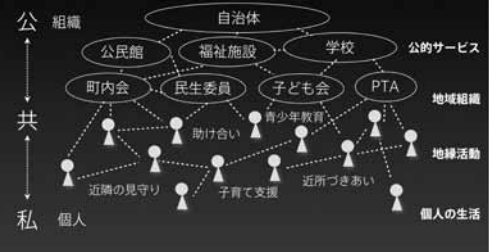
人と人とのつながりが、地域活動へ発展する



SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

ソーシャルキャピタルの視点から

・かつての地域社会＝「共」領域の人間関係が支える



SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

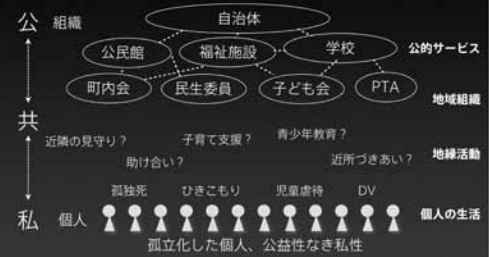
「小さな地域活動」

- ・主体の多様性
＝地域内外の学生、子育て層、シニア層、在勤者etc
- ・小規模
＝NPOや地縁組織ではなく、3人から20人程度
- ・自発的、個人的活動
＝行政からの要請ではない 公的施設職員も参加
- ・公益性
＝個人の利益ではなく、地域の利益の追求
- ・柔軟性
＝地域の様々な施設、組織との柔軟な連携

SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

ソーシャルキャピタルの視点から

・都市コミュニティの課題：「共」領域の活動低下



SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

芝の家とコミュニティ形成

コミュニティ＝一人ひとりの人間関係の質と量の集合

ふだんの「芝の家」＝誰もがいたいようにいられる場

↓

地域内外の人が、さまざまなことを場に持ち込み、交流する

↓

新たな人間関係が生まれ、新たな活動がはじまる

↓

多くの人間関係や、多くの小さな活動が網の目のように広がる

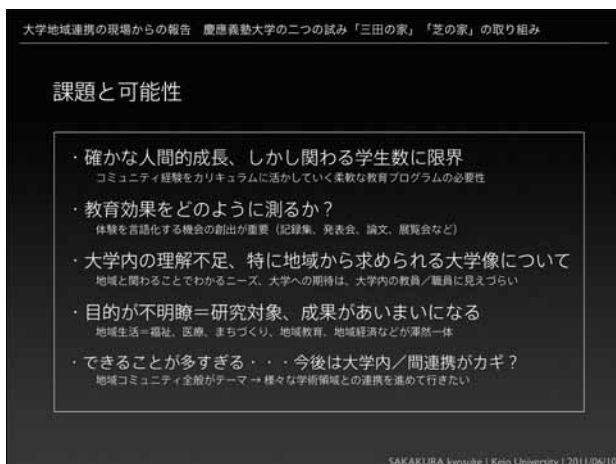
SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10

ソーシャルキャピタルの視点から

・芝の家＝新たなソーシャルキャピタルを育む場



SAKAKURA kyosuke | Keio University | 2011/06/10



【課題と展望】

① 中長期的に見て、三田の家を存続させるべきか否か、また関係者各自が個人的に三田の家をどこまで存続させたいと思っているか？を互に見極めたい。そのための議論の場が必要。

② もし、長期的に三田の家を存続させるべきで、関係者各自が存続させたいと考えている場合、プロジェクト当初からの最終目標であった「21世紀的学生街の創出」を実現するために、今後どのような方法論が必要か？

③ ②とも大いに関係するが、芝の家との関係を今後どのように有機的かつ生産的にするか？もしかすると、「21世紀的学生街の創出」を実現するには、三田の家／芝の家以外の第三、第四の「家」ないし「場」が必要とされるのではないかな？

④ 今後、三田の家の運営を財政的にどのようにすべきか？現在までは、文部科学省の研究費や慶應義塾創立150年記念未来先導基金からの助成を受けていたが、今後、基金も永遠に続くものでもないため、早急に財政的問題を解決しなくてはならない。大きく分けて二つの方向が考えられる。一つは、慶應義塾の社会・地域連携事業としてきちんと位置づけてもらい、予算的にもそれに見合ったものを恒常的に出してもらおう。もう一つは、慶應義塾から経営的に独立する。外部の助成金や会費や寄付などで運営するシステムを作る。

⑤ 運営スタッフ・マスターの世代交代の必要？立ち上げ当初から関わってきた教員＝マスターたちがある程度の達成感を持っているなら、新たなマスター＝教員をリクルートする必要がある？

⑥ 三田商店街との関係。立ち上げ準備期間そしてオープンから1～2年は、商店街との関係は密であったが、その後、商店街のイベント等の手伝いはするものの、それ以上生産的な関係を結べていない。新たな関係性を考える必要がある。

カドベヤ

担当：横山 千晶（法学部教授）

武藤 浩史（法学部教授）

2010年4月4日に横浜市中区と南区のちょうど境にオープンした、人と「コト」が会う場所である。また、この「カドベヤ」は文部科学省の通称「教育 GP」事業に2009年度に申請して採択された塾外の活動拠点でもある。「カドベヤ」は近くの寿地区や石川町五丁目界隈に住む人々や、働いている人々が自由に出入りして、いろいろな人に会い、新しい「コト」を起こしていく場所として、慶應義塾大学とコトラボ合同会社が協働で運営するオルタナティブ・スペースである。「カドベヤ」は慶應義塾大学の授業で使われる以外に、コトラボ合同会社とともにさまざまな町づくりや就労支援の企画（「石川町裏っかわ市」や「朝市」）に学生が参加し、町と人の在り方について体験から学ぶ場所として機能している。寿地区は負のイメージが強く、問題を抱えているが、同時にこの街の持つ可能性も計り知れない。世代も職種も異なる人々がネットワークを組むことで、この街の持つ人的・場所的な資源を再確認し、掘り起こし、様々な創造力で町を、自らを活性化する方法を、学生が主体となって考えていく場を目指している。

カドベヤ

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/gp/>

<http://koto-lab.com/kadobeya/index.html>



横山 千晶氏

横浜、寿 「みまもり」、そして「カドベヤ」

第1回「社会・地域連携セミナー」

2011年7月20日（水）

法学部 武藤浩史・横山千晶

（発表者 横山千晶）

お話しすること

1. 横浜という町 —Creative City Yokohama
2. 横浜の光と影 —「黄金町」と「寿地区」
3. なぜ寿を社会連携の場所として選んだのか
4. そこで何を行うのか
 - ・プロジェクトその1 —みまもり・ききとり・ものがたり
 - ・プロジェクトその2 —「カドベヤ」と「動く教室」
5. 成果と問題
6. 今後の展開

2

1. 横浜という町

■ Creative City Yokohama



New Waterfront 象の鼻パーク



2. 横浜の光と影



私達にとってのコミュニティとアート

■ クリエイティブシティ・ヨコハマ



大阪、釜ヶ崎

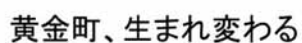


クリエイティブシティ・ヨコハマと「創造界隈」



横浜、黄金町





横浜、寿地区



3. なぜ「寿」か？

- 横浜の、そして日本の経済成長を支えてきた町と人々→テキストとしての町
- 「高齢化社会」、「無縁社会」の縮図
- さまざまなNPO団体や社会起業家の活躍
- 「三田の家」「芝の家」に続く日吉版の設立
- 自分たちの専門との関係 →19世紀の大学セツルメント運動、1990年代のブレア政権と政策



元町ショッピングモール

寿人口							
年	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
住民数	2219	2573	2641	2808	2924	3039	3215
60～64 才	998	1143	1183	1140	1156	1097	1240
65～69 才	709	807	827	927	969	1055	1074
70～74 才	359	427	423	487	503	558	570
75才	153	196	208	254	296	329	331
男性	2148	2484	2552	2707	2821	2926	3094
女性	71	89	89	101	103	113	121
前年比	8.7%	16.0%	2.6%	6.3%	4.1%	3.9%	5.8%

- 町を教科書に見立てる
- 住民から学ぶ → 人を通して町と歴史を知る
- NPOや社会起業家から学ぶ
- 寿で活動するNPOや社会起業家、そして住民と協力し、協働のもとで新しい物事を作り出す

42

毒物語プロジェクト(みまもり・ききとり・ものがたり)

2

■大学としての地域貢献

17

 日本三大寄せ場の一つである、横浜市寿地区、
 寿周辺地区においてホームレス及びホームレスに
 至るおそれのある人々が、自ら自立に向かい
 やすい環境を整える「自立自活」を主な目的とし、
 メンタルを一番大切にしてながら
 「医・衣・職・食・住」の各方面で活動しています。

さなぎ達（猫の鳴き声）
 寿南地区より100 匹
 ボーダー・クニニクス製
 グリーン・ペンダント・観葉植物
 ヘルパーステーション

クニニクスの開設（元・クニニクス）
 ヘルパー・派遣コーディネーター
 地区巡回モデルを考案製造
 心療内科・精神科・精神科（メンタルケア）

さなぎ達の家
 （住宅・生活環境改善）
 本職/フリーランス
 （生活・生活環境改善）

ヘルパーの派遣
 ショッピング・ボランティア活動
 食生活の改善

食生活の改善
 生活環境改善

住
 医
 衣
 職
 食
 メンタル

自立自活

- パートナーとなるNPO、社会起業家の模索と話し合い、国内外の他の試みの聞き取り調査やWS参加
- リスクマネジメント
 - ・他の教育団体への聞き取り・学部長への説明
 - ・伊勢佐木署との話し合いと協力要請
 - ・リスクマネジメント・ルールの作成
 - ・「加害者」とならないための保険加入
 - ・メンタル・ケアのための方法の模索(振り返り)と看護医療学部への協力要請

42

一緒にじゃない、安心して暮らすために

KMVP
(おみまもり
ボランティアプログラム)

家族のように、見守るボランティア

身寄りのない高齢者をサポートする
KMVP 応援プロジェクト

高齢化を迎えた
住民たちの“家族”でありたい。

主 衛 士

プロジェクトその2 大学としての地域貢献:カドベヤと動く教室

カドベヤでの朝市



22



寿に新しい風を入れる

事業パートナー
コトラボ合同会社

横浜、ホステルビレッジ



「動く教室」の開始(2010年6月)



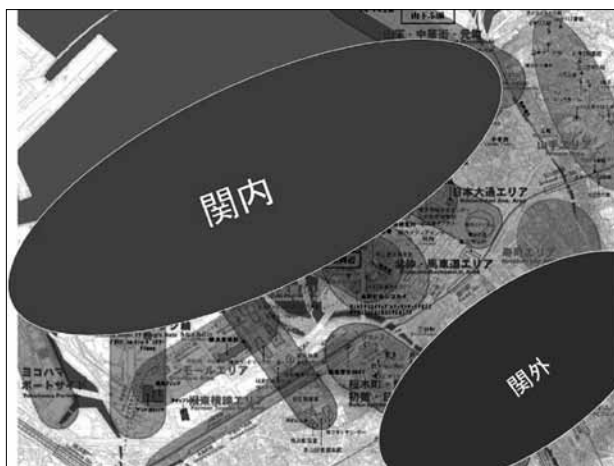
オルタナティブ・スペース、カドベヤ
(コトラボと共同運営、2010年4月開設)



誰でもが「動くこと」を介してつながる場所

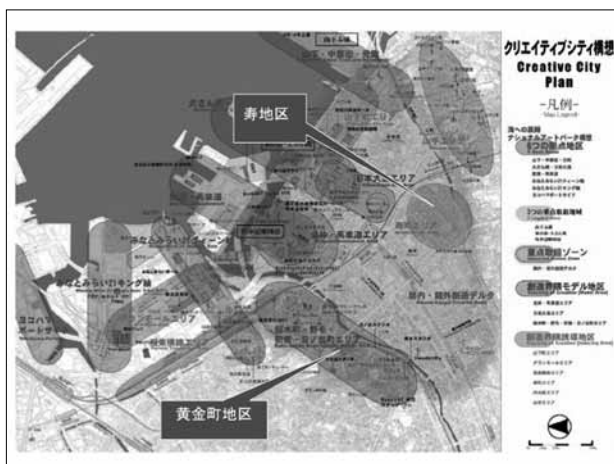


アーティストの協力



5. 成果と問題

- みまもりとカドベヤを中心に
して様々な活動を展開
 - ・裏っかわ市
 - ・朝市
 - ・レンタル・スペース
 - ・さまざまなワークショップ
 - ・「さなぎの家」の利用者さんたちの
日吉キャンパスでのグリーン活動



問題

- ポストGPをどうするか？
- リスクマネジメント
- 寿という町のむずかしさ
- 石川町の町内会の理解
- 行政との関係

34

6. 今後の展開

- 寿町と町の周辺部をつなぐ
 - ・高齢化する石川町の空き部屋を自立支援に使用
 - ・自立支援のプログラムを開発
 - ・地元住民の協力を仰ぐ
 - ・寿地区も含めた地元の活性化
- 横浜と日本をつなぐ
 - ・高齢化社会と教育をつなげる
 - ・創造力を生かした社会の構築

35

【課題と展望】

「横浜」というと誰もが思い描くのは大栈橋から一望のもとに見渡せるみなとみらいのスカイラインであろう。クリエイティブシティ・ヨコハマの名のもとに「創造都市」をその肩書きとする横浜は創造力を土台として世界に開かれた町づくりを目指している。しかしその華々しい姿の裏には黄金町や寿地区といった横浜のみならず日本の高度成長を支えた影の部分が存在している。しかし横浜の歴史の隅に追いやられたこれらの影の部分にこそ、光と影の厚い歴史の層があり、そこから若者たちが学ぶことは大いにあるだろう。

その考え方のもとに、2009年度より日吉キャンパスでは寿地区を拠点に教育コンテンツを展開し、この地区

に拠点を設けることで、地域と大学をつなぐ試みが始まっている。

寿を社会連携の基盤とする理由はいくつかある。まず寿地区は横浜の、そして日本の経済成長を支えてきた歴史と人々を抱える町であるということ。また当地区の簡易宿泊所に住む人々およそ6500人のうち、60パーセント以上が60歳以上、80パーセント以上が生活保護受給者であるという現状から、高齢化社会や無縁社会の縮図となっていること。同時にさまざまなNPO団体や社会起業家の活躍が目覚ましいことなどである。授業と地域活動を通してこの町を教科書として読み解き、同時にここに住む人々や活動する人々から学び、歴史を風化させることなくそういった人々との協働のもとに新しい物事を生み出すことが、この社会連携活動の趣旨である。

現在行われている活動は二つある。一つは法学部設置の授業の中で、寿地区のNPO団体との連携のもと、独居老人のみまもり活動を行い、人を通して学んだことをリサーチと絡めることで人と町の物語を紡ぎ、あとに残していく作業である。そして今一つが地元の社会起業家と協働で横浜の拠点「カドベヤ」を運営し、その中で人をつなぎ合わせるコンテンツをアーティストの協力のもとに展開していくことである。

まだ活動を始めて1年足らずではあるが、その間に寿地区は横浜市の「創造界限」の一つに入ることになり、少しずつ変化の兆しがある。同時に寿という場所に対する根強い思いは容易に払拭されるものではないことも明確になってきた。しかしそれもまた歴史の一部と受け止め、人々をつなげる活動を地道に続けていくしぶとさの必要性もあらためてかみしめている。この町の問題を日本の問題として次世代教育へとつなげていくことが今後の課題となるだろう。

ヒヨシエイジ

担当：長田 進（経済学部准教授）

2003年に発足し、日吉住民と慶應義塾大学の学生の有志が一体となって日吉の街を盛り上げていく10年スパンのプロジェクトである。地域住民・慶應義塾大学の学生・教員有志がヒヨシエイジ協議会を組織して全体の方針を決定し、学生を中心とするヒヨシエイジ実行委員会が地域活性化イベントの企画・運営を行なっている。

ヒヨシエイジの「エイジ（AGE）」という名称は、"Art, Gate, Effect"（アートを通じて大学・地域社会の架け橋として働きかける）という立ち上げ初期のコンセプトに由来している。当時はHIYOSHI AGEというローマ字を使用していたが、後に読みやすさ、親しみやすさを考慮して“ヒヨシエイジ”とすべてをカタカナで表記するように統一した。

2003年から2006年までのヒヨシエイジは、キャンパスの陸上競技場で打ち上げる花火と融合したアート・パフォーマンスをメインイベントとしてきたが、活動領域の拡大、目標の変化もあり、現在では狭義のアートに限らず、また、規模の大小にかかわらず、さまざまなイベントやワークショップの企画・運営を通じて地域社会と大学の連携をはかり相互のつながりを広げ深める活動を継続的に行っている。

日吉エイジ

<http://www.hiyoshiage.com/index.html>



長田 進氏

「ヒヨシエイジ」の活動紹介

慶應義塾大学経済学部
長田 進

1

ヒヨシエイジの概要

- 塾生・教職員と日吉の住民が連携・協働して企画・運営するプロジェクトの総称
- →実は学生団体の活動ではないことに注目
- （参考）アートを通じた大学地域連携
- Hiyoshi AGE
- Art.
- Gate.
- Effects.

2

ヒヨシエイジの目的

- 地域と大学の新しい連携の形への模索
- 1) 大学と地域との交流促進
- 2) 地域活性化
- 3) 参加学生の教養言語力の育成

3

活動組織

- ヒヨシエイジ協議会
 - 活動方針の確認・意見交換(年2回の実施)
 - メンバー
 - 地域住民
 - 慶應義塾大学の関係者
- ヒヨシエイジ実行委員会
 - 具体的な行事の組織運営を担当

4

ヒヨシエイジの活動

- メインイベント
- 主催イベント
- 地域主催イベントへの協力

7

ヒヨシエイジ協議会(2010年度)

- 会長
薄井芳夫(日吉地区連合町内会会長・日吉商店街協同組合理事長)
- アドバイザー
牛島利明(慶應義塾大学商学部教授)
長田 進(慶應義塾大学経済学部准教授)
神島理恵子(日吉キッズステーション代表)
若木信子(日吉地区社会福祉協議会)
漆原友子(こどもの本のみせ ともだち)
- 委員
日吉住民有志、実行委員(学生)で構成

5

(参考)メインイベント概要

- アート・パフォーマンス(2003年～2006年)
 - 陸上競技場で打ち上げる花火
- 日吉フェスタ(2007年～)
 - 「日吉フェスタ」
 - (移行の背景)競技場の改修工事

8

ヒヨシエイジ実行委員会 (企画運営組織)

- 代表(2011年度)
 - 原田 晃成(慶應義塾大学経済学部3年)
- 実行委員
慶應義塾大学の学生有志で構成
(決して多くない)

6

活動1:日吉フェスタの概要

- 概要:日吉地域の活動の発表大会
- 日時:10月中旬の土曜(11:00～16:00)
- 会場:慶應義塾大学日吉キャンパス
- 動員数:約4,000人
- 活動概要
 - (1)COMMUNI FIELD(ブースイベント)
 - 於:来往舎前並木道
 - (2)ART MIXTURE(ステージイベント)
 - 於:来往舎イベントテラス

9



活動2: 主催イベント

- 日吉フェスタ開催に向けての連動企画
- ヒヨシエイジの広報活動にも関係
- 対象者: 比較的少数(数十人を対象)

- (1) 地下壕見学会(2010年開催)
- (2) フリーペーパー作成(2009年、2010年度)
- (3) ヒヨシメグリⅡ(2009年開催)
 - 小学生向けオリエンテーリング
- (4) 写真展(2009年開催)
 - 各年度のテーマを設定

13



活動3: 地域主催イベントへの協力

- 地域で行われている各種イベントのお手伝い

- 2010年の事例
 - NPO法人活動ホームしもだ「第21回地域交流バザー」の運営協力
 - 箕輪町子供会のハロウィンイベント
 - 鯛ヶ崎公園プレイパークのハロウィンイベント

14



活動について(メモ)

- 地域の認知度が高くなっている
- 活動の主体について
 - 学生の団体活動と思われがちだが実は地域との関係を反映して活動
- 学生の立場から
 - 活動に関わる学生数が決して多くない
 - 運営の困難さとの関係
- 活動の資金について
 - 実のところ大学からの資金が大きな役割

15

(参考)塾、関連団体との関係

※2006～2008年

慶應義塾創立150年記念イベント認定

※平成19～23年度慶應義塾大学日吉キャンパス
調整予算採択プロジェクト

※横浜市港北区港北ふるさとサポート事業に参加
(平成17・18年度助成対象事業、19～21年度協
力参加)

※東横線80周年記念イベント(2007年度)参加

16

(参考)2011年度の活動について

- 日吉フェスタ 10月1日(土)に開催予定
- 地下壕見学会(実施予定)
- 留学生交流イベント(企画中)

17

となる3年生が2名、全体で見ても10人足らずの人数で各種イベントの企画・実行を行っている。これは活動内容に制約を与えかねない。安定的な活動を行うためにももう少し多くの学生をリクルートすることがヒヨシエイジに関係する学生にとっての大きな悩みとなっている。

また、資金面など組織運営について、財政面での自立の問題も無視できない。ヒヨシエイジは、日常的に行う活動については幸い大きな赤字を出さずに運営できているが、日吉フェスタのような大きな企画を単独で実行可能なほどの余裕はなく、義塾の内部資金に大きな依存をしている。その意味では日吉地区の調整予算の果たす役割は大きい。(なお、地域紹介のフリーペーパーの作成を始めたのは財務面での自立を目指したという側面もあることを付記しておく)

以上のことを踏まえて今後の検討を行う事になるが、ヒヨシエイジの活動ももうすぐ10年経つことになる。そろそろ、今後の方向性について活動メンバーの間で話し合う必要が出るのではないと思われる。

【課題と展望】

現在のヒヨシエイジが抱える問題は、発足時のヒヨシエイジは、学生が地域貢献イベントをプロデュースするのではなく、学生および大学関係者・地域住民・商店街関係者などの日吉の人々が、対等に協力する関係を作り上げるための活動全体を指すものである。

まず活動主体の問題がある。ヒヨシエイジの本来の趣旨からすると、活動主体は学生だけでなく地域住民など多様な人々が参加しているのが望ましいが、実際には学生による活動になっている。この点で活動する学生にかかる負担が大きくなっている。

それに付随して、活動主体となる学生の確保がヒヨシエイジの課題となっている。2011年度の場合、主力

ディスカッション

種村 それでは、以上の基調報告を受けまして、コメンテーターからコメントをいただきたいと思います。商学部の牛島先生です。牛島先生は三田キャンパスの所属で、経済史をご専門になさっておられますが、先ほど長田先生の方からご紹介がありましたヒヨシエイジの活動に初期から加わって、リーダー的な役割を果たしていらっしゃる。また、日吉の商学部の開設科目で総合教育セミナーという科目があるのですが、その中で「21世紀の商店街」、今は「地域との対話」というタイトルで、地域との連携を主題に、少人数セミナーを行うなど、日吉キャンパスの社会・地域連携の模索ということに、非常に深くかかわっていらっしゃる先生です。

日吉のキャンパスの地域連携活動の展開を、三田からの視点でお話いただければと思います。

牛島 商学部の牛島です。どうぞよろしくお願いいたします。4つの活動についてご報告を伺って、非常に多様で活発で、個々にいろいろお尋ねしたいこと等がありますが、時間の限りもありますので、私が抱いた印象をいくつかコメントに代えてお話しできればと思っています。

一番最初の種村さんの問題提起の中で、地域連携と大学、地域連携と教育というお話の中で、社会貢献型と教育重視型に対比されるというお話がありましたけれども、ちょっと別の分け方をしてみますと、1つは、たとえば社会実験型のような要素が入るものも含めて、問題

解決志向が非常に強いスタイルのものが1つあります。これは必ず成果を要求します。つまり、教育としてもそうですし、場合によっては受け入れるフィールドの側が成果に期待するという側面が強いタイプの活動です。

それに対してもう1つのパターンというのは、あらかじめ用意した分析ツールとか、あらかじめ決められた問題というものを持ってフィールドに行くわけではなくて、まずとにかくそこに入ってそこにいて、まったくよそ者として入るわけですが、フィールドにいるいろいろな方々と徐々に関係性を変えていく。その中でいろいろなことに気付いたり、場合によっては外から何かを持ち込んだりとか、さらにいけばその人たちのため、その地域のために貢献したいというように、発展していくようなパターンがあるだろうと思います。

最初の問題解決志向が非常に強いパターンというのは、どちらかという、例えば慶應でいきますと社会科学系の専門分野がある三田キャンパスの活動とか、研究教育とある意味相性がいいタイプなのではないかと感じています。今日の報告を伺っていますと、4つの事例はどちらかというと前者ではなくて後者、つまり何か特定のフレームを持って問題を解決していこう、成果を出していこうというよりも、やっぱりその「場」、そこにいる人たちとの関係性をあらかじめ決めない、つまり事前に何が起こるか分からない、予測できないタイプの活動が多かったのではないなという印象です。

これは、もちろん悪い意味で申し上げているわけではなくて、むしろ積極的に評価すべきというところで申し上げます。例えば、我々三田の教員で、ある社会科学系の専門分野を持っていると、まず考えるのはその専門的な分野、例えばマーケティングならマーケティング、中小企業論だったら中小企業論という特定の調査研究の意図を持ってフィールドを使ってしまう、どうしても短期決戦で成果を挙げたいという活動になりがちです。たぶん日吉の先生方が志向されているのは、どちらかという、そういうタイプのものではなくて、例えば三田の家の話で熊倉先生がおっしゃっていたような、「無目的な場所」という言葉は、そういう活動の志向を象徴しているのではないかという気がいたしました。

問題解決志向が強い活動というのは、短期決戦で成果



牛島 利明氏

を出すという難しさはありますけれども、フィールドとの関係性はあまり深く考えなくてもいけるところはあるのですが、おそらく日吉の先生方が目指されている地域連携の在り方とか、それとかかわる教育の在り方というのは、たぶんそういうものではなくて、もっとゆっくりと時間が必要なもので、結局最後まで最終的に何が出てくるかというのは、完全に予測し得ないものという印象を強く持ちました。

次に今日は「大学教育と～」というテーマですので、そこに引き付けてコメントさせていただきたいと思います。やはり、まず教育との関係という点で念頭に浮かぶのは、今、我々が各学部でやっているカリキュラムと、地域連携の活動がどう関係するのだろうかということですね。先ほどお話ししました最初のタイプですと、これは大学の持っているカリキュラムには、比較的組み込みやすいタイプの活動だと思います。慶應にも、おそらく他大学にもすでにいくつかモデルがあるでしょう。運営の難しさとかコストとか、成果のクオリティーとか、課題はいろいろあるとは思いますが、組み込もうとして組み込めないものではない。

ただ、たぶん日吉の先生方が今日のご報告の事例で志向されてきたようなタイプの、非常に時間がかかってゆっくり進んで、しかもかなり懐の深いタイプの活動というのは、おそらく既存の大学のカリキュラムにそのまま組み込むというのは、難しいというところがたくさんあると思いますし、もしかしたらそもそもそういうことを考える必要もないのかもしれないという個人的な感想を持っております。

ただ、もし日吉の先生が考えておられるようなタイプの活動が、既存のカリキュラムとかこれから考えていく大学のカリキュラムと一切関係ないかということ、もちろんそんなことはなくて、おそらくはフィールドに行きたくなくなるような、もしくはフィールドに行ったら戻って、やっぱり大学で何かを確認したいとか勉強したいということになるような、そういうタイプの何かをカリキュラムの中にうまく組み込んでいけば、おそらく大学の内部で行われる教育とうまくつながってくる側面が、より強化されていくのではないのでしょうか。

実際、庄内セミナーもそうですし、芝の家でプログラ

ム化して人材教育をしていこうという動きもあるようですし、当然カドベヤでの活動というのも大学のカリキュラムと関連性を持たせて始められていらっしゃると思うので、すでにそういうところは意識されている。問題はそれを教養研究センターなり、各学部のプログラムの中に本当に落ち着く形で埋め込んでいくためには、それぞれの先生方のご経験を踏まえて、このセミナーのような場を繰り返していくことによって、充実していく方法が有効だろうと思っています。

あともう1つコメントさせていただきたいのは、それぞれの先生方、それぞれの活動がほぼ共通して課題として挙げられていたこととつながると思いますが、おそらく地域連携活動とか社会貢献活動というのは、今活動を支えるためのガバナンスの問題というのがものすごく問われています。これは実は、何年も前から問われていたことです。教育が教室の中だけで完結する場合には、大学もしくは教員と、学生との関係性だけを考えていけば、それで十分にうまくいくのですけれども、その活動を外に広げたとき、フィールドに登場する主体にはいろいろなタイプの人たちがいるわけです。何か活動をしているときに、いろいろな主体の間の権利と責任の構造というのを、どういうふうに考えていくのか。もっと積極的な言い方をすると、学外の多様な主体との関係性をどういうふうに大学がとらえて、そこに参画していくのかということが問われている。しかし、今のところ我々も大学全体もこのような問題に十分対応しきれてないという実情があるのではないかと思います。

ごく部分的に見れば、例えばリスクコントロールの問題とか、資金や教員の負担という意味でのコストの問題というのは、ガバナンスの問題の1つだと思います。ただ、それが全部ではないわけです。例えば、先ほど長田先生にお話ししていただきましたヒヨシエイジは協議会というスタイルで運営しています。これは、かつて小渕昭夫先生が構想されて始めたやり方なんですけれども、そもそもは学生、住民、そして大学が対等な立場で、何か1つのものをつくっていくという場をつくりたいということから出てきているのですが、その発想は学内・学外ともになかなか理解されませんでした。

ヒヨシエイジについて話をすると、まず「主催はどこ

なんですか」と言われ、「ヒヨシエイジ協議会です」と答え、次に「それは何なんですか、誰が責任を取るんですか」と尋ねられる。それが何年も何年も繰り返されてきました。ヒヨシエイジは学生サークルでもないし大学でもないし、町内会、商店街でもなくて、それらが対等な立場で組み合わさって、何かをやるという理想的なコンセプトではあるのですが、やはりそれを実際に機能させるのは非常に難しいですし、なかなか理解されません。資金は大学の予算を使っているにもかかわらず、例えば責任は連合町内会の会長さんが務め、地域住民や学生・教員が委員として参加する協議会が負うというような責任と成果の配分の構造というのはいくらも理解できないし、我々自身もうまく調節、説得できないままずっとやってきたというところが、あるんじゃないかと思います。

これはおそらく、今日さまざまな発表をいただいた活動では、多かれ少なかれ皆さんが抱えているだろう問題だろうと思います。大学といったときに具体的に何を指すのかも分からないんですけれども、大学の中でも、ある活動について最終的にどこまで大学が責任を持つのか、といった問題はおそらく繰り返し出てきているということです。責任だけではなく、お金の問題もそうでしょう。

要は、大学自体が大学と学生というような枠組み以外の組み合わせの活動を、うまくガバナンスする体制がまったくできていないのです。比較的分かりやすいのは大学と自治体というような、組織対組織の関係です。それでも難しいところがあると思いますが、そこから一步はみ出した途端に、大学における教育・研究活動との関係で安定的な組織とか、安定的な活動として位置付けることが難しくなります。だから活動やその成果をうまく波及させていくことも難しいのではないのでしょうか。これは勝手な感想かもしれませんが、そういう思いを持っております。

この問題については、活動を行っている先生それぞれに、思いがあると思いますので、私のコメントは以上にさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

種村 牛島先生、どうもありがとうございました。今の

コメントで、非常に重要なポイントをご指摘いただいたと思います。特に私の印象に残りましたのは、それぞれ外に出て活動した後に、それを持ち帰って大学のカリキュラムにどういうふうに進め込んでいくか、言い換えれば、大学でどのような場を作れるかということです。この問題こそがおそらく今回の連続セミナーを通して考えるべき、教養研究センターとしての社会・地域連携への枠組み作り、取り組み方の模索という問題であり、そのことをご指摘いただいたのかと思います。

それでは、これまでのお話についてさまざまな視点から質問、あるいはご意見などをいただきたいと思います。まず最初に私から質問と申しますか、今日の発表者の方々にお話しいただきたいと思うのですが、今日の発表のキーワードとして「小さい」と「自由」という2つが挙げられるかと思います。それぞれの活動においてさまざまな自由な展開がなされているのですが、受け入れの枠というか母体が小さかったり、あるいは参加する学生の数に限界があるということです。

それぞれの取り組みに参加した学生の人間的な成長というものはもちろん見えるけれども、少数の学生を対象に、小さい枠組みで活動するということの意義についてどのように考えていらっしゃるか、それぞれお話しいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

羽田 種村さんご指摘のプロジェクトのスケールの問題、これは発表ではコストパフォーマンスと絡めてお話ししましたが、もう1つ付け加えるとすれば、大学はこここのところ少人数形式の授業に非常に大きな意義を見いだしていますし、実際、慶應だけでも、少人数授業は各学部になんども形で数多く用意されています。とりわけ日吉の場合はそれが学部の枠を越えて履修できるようになっており、カリキュラムとしてもかなり充実してきていると思います。もちろん庄内セミナーは授業という形での位置付けはしていませんけれども、趣旨とか考え方の基本に関しても、少人数で何がどこまで深められるのかといった点では、同じような方向性で考えているということがあると思います。

もう1つの自由に関しては、庄内セミナーのプログラム自体は自由に設計できる、デザインできるということ

がカリキュラムに縛られない大きな利点ではないでしょうか。あとは残念ながらこれまで3年やって2人しか参加がないのですが、庄内セミナーの基本的な考え方として社会人や地元の人の積極的な参加を歓迎するというのも自由の一つです。学生が教室に閉じこもったままにならない、そういった意味での自由さというのが、新しいタイプの学びを考えていくときには大事なポイントになると思うので、それを生かせるように、今度はセミナーのあり方や経験をむしろカリキュラムデザインに反映させていけるという、そういった実験として位置付けられるかなという気はしています。

熊倉 まず「小さい」という方からコメントしますと、少なくとも三田の家の場合、「小さい」は立ち上げ当初からのキーワードの一つでした。例えば、先ほど国際交流の話を出しましたが、もちろん海外のいろいろな大学と協定を結んで、研究者や学生の交流をしていくような「マクロな」国際交流も、非常に大事なことですけれども、もっと足元といいますかミクロなレベルでの交流も重要だと思うんです。実際例えば外国人留学生が

日本の言語や文化を学びたいとキャンパスにいるのに、大学の方は彼らが日本人の学生と気軽に会えて、新たな発見をし合うような環境、場をほとんど準備してなかったわけですね。そういう交流はミクロで小さいかもしれないけれども、各個人にとっては非常に大事な体験になる、そういう意味で「小さい」を1つのキーワードにしてきたわけです。

これまでの資本主義を中心とした社会の在り方は、どちらかというと大きいほうがいい、量が多いほうがいい、高いほうがいいという価値観が生み出すようなシステムだったと思うんですけれども、そういうシステムが取りこぼしていくものが社会にたくさんあるわけですね。その象徴が寿町だと思うんです。今、改めて大学は、大きい・多い・高いというものだけではなくて、そのようなシステムが取りこぼしてしまったものに、視線を向けるのみならず、その現場に入っていくことが必要だと思います。

もう一方の「自由」ですが、例えば今、文部科学省は、大学に対して、シラバスという形で、1年間の授業を、未来はほぼ確定的であると前提して、プログラムしましょうと指導しています。けれども、例えば社会や文



化の現在や近未来を扱っている授業のような場合、1年後に何が起るかということは本当は分からない、未来は不確定なわけで、それに基づいて授業も行わなければならない。その不確定性の象徴が、今回の震災であり、原発の問題なんですね。先ほど、社会のリスクマネジメントというお話がありましたけれども、最終的には我々が培ってきた知、あるいは社会の中で、未来の不確定性をどう考えるか、それに対するリスクマネジメントをどうするか、そういった問題提起を怠ってきたわけです。今はその怠慢が露呈している状況です。だから、これからの大学はそういう意味でのリスクマネジメントも、授業においてのみならず考えていかなければいけない。そういう状況で、「自由」ということも、あらためて考え、定義しなおすことが非常に重要かと思います。

横山 慶應が抱えている問題は、規模が大きいということだと思うんです。私も教養研究センターの活動にかかわっていてよく言われることが、やっていることはいろいろ面白いけれど、多数の学生に应用できるのかということです。その一方で開所5年後の外部評価の際に、多数が相手ではないことを返って評価して下さった評価委員もいらっしゃいました。

私自身も実はそれしかないと思っているんです。例えば今回の寿のみまもりの授業も、少人数の学生を相手にする。その代わり一人ひとりを徹底的に見守ろうというスタンスを取っています。おそらく社会調査でも傾向として見られるのは、データだけでは計りきれないところを、フォーカス・グループのように一定数の個人を追跡してその変化の様子を追っていくということだと思うんですね。もう1つのいい例が今回の東北の大震災のメディア報道です。個人や家族のその後を追うことによって全体の中の個人、個人の中の全体を見ていく手法です。そういった報道の仕方がいいかどうかは賛否両論だと思いますが、1つのやり方ではあるでしょう。

ですから私の場合は、その小ささを重要視しています。寿という小さな町で、そこで学生が接する人たちもごく限られた数の人たちですけれども、ある1人を通じて、学べることの深さは思った以上に大きなものです。つまり人間というのは「生活保護受給者である」、「障害

がある」という単なる可視的な表層レベルで生きているのではないということ、個人には個人の深い歴史があることを学生には分かってほしいと思っています。もちろん生活保護の問題はいろいろある。生活保護受給者の人口が増えれば増えるほど、苦しむのは納税者だし、問題の根本的な解決にはならない、という批判がある一方、その対象者である人間が今までいかにして生きてきたかということは、その批判の中では見えてこない。個人の問題を社会の問題として考える必要があるのです。そのためにはやはり表面に見える事実だけをなぞっていてもだめなのです。小さなことをつきつめることで見えてくる大きな物語が、必ずあると思っています。

あと、「自由」でしたよね…。自由って難しいですね。私は今の学生は自由であるように見えて、まったく自由でないと感じています。つまり、いろいろなところに…さっきリスク・マネジメントのお話がありましたけど…いろいろなところであまりにたくさんの安全網が張り巡らされてしまっている。例えば、私は法学部に所属していますが、今の学生は、とりあえず法律は学んでいて、労働法も生活保護法も知っているんです。ところが、路上生活者には1度も会ったことがないという学生が案外多い。もちろん寿地区はみなとみらいや元町からはすぐ近くなのですが、その存在すら知らない学生も多いし、横浜で育った学生ほど、親や学校から危ないから絶対行くなと言われ続けてきている。

これが実情です。先ほど「責任」という問題が出ましたが、寿を教科書にするときは、いつでもこの責任を考えていかなければいけない。確かに住民は前科者を含め、過去を引きずりながら生きている人々が多いです。住民自身が「皆わけありだからね…」とよく言う通りです。では、そんな人々と学生とをどうやって出会わせたいのでしょうか。これはいつでも問題です。

同時にこんな時私がすぐに考えるのは、「慶應」という名前だったりします。いわゆる大学の名前に傷がつくような事件が起きたらどうしよう、と…。でも、ある程度こういった名前の縛りからも自由にならないと、つまり自分自身を慶應義塾大学の教員という肩書から引き離してひとりの個人とならない限りは、自由や責任からはまさに「自由」にはなれないんだろうと、時々思うよう

にしています。

ただ、関西でいろいろな社会連携の活動にかかわっている大学にこのような問題について伺ったところ、こんな回答をいただきました。ようするに教育にかかわる1人の人間がどれほど今学生に伝えたいことに臨場感を持って、つまり現実的にこれが大切だと思って、取り組んでいくのか。これが大切だろう、ということです。つまり、大学側がいくらそれはやるなと言っても、あなたが正しいと思うんだったらやるしかないでしょう。そしていざとなったら自分の教員人生をかけても責任をとるというぐらいの臨場感、それが一番正しいリスクマネジメントなんじゃないでしょうか、ということでした。確かに私自身は今の学生に一度は寿という町の存在を知らせたいし、そこで生きている人々と話をしてほしい。私にとってこれは非常に大切な教育です。どこまでこの強い気持ちを持って、でも緊張ばかりではなく、やっていることを私自身も個人として楽しんでいけるのか、というそのバランスが必要なんでしょうね。私自身が町と向き合うのは教育のためだけではなく、横浜住民の自分にとっても個人的に重要だからなんです。

長田 私にとっての少人数制の意味として、他の授業との関係からお話ししたいと思います。私は普段の授業を中規模教室で行っています。こちらでは受講生の数が多いので、学生に対して個別に対応するというより、全体の雰囲気から自分なりに推測して講義を進めていくことになります。私にとって、少人数による学生の活動を支援することは、中規模教室で行う講義に対する反動として関わっていると思っています。そして、少人数制の活動は、参加する学生の個性がよくわかるので、きめ細かく対応できるというところがよいところだと思っています。一方で、少人数による活動は、慶應のような大規模な大学では、非常に限られた学生としか顔を合わせないという閉鎖的な活動に陥りがちになることに自覚的であらねばならないと思います。もっとも、教員との関係を抜きにして自分たちで様々な活動を始めている学生もいることでしょうか、このことが大きな問題だとは思っていません。

私が最も気にしているのは、何かしたいと思っていて

も、実際にどのようにしたらよいのかが分からない学生に対してどのように接するのかという事です。これらの少人数制の活動によって学生にとって、漫然とした学生生活を送る以上の何かよいきっかけを作ることになればよいと思っています。ここでのきっかけとは、大切な友人との出会いかもしれませんし、思い出に残る行事に参加することなのかもしれません。

現在のヒヨシエイジの活動は、実際に活動している学生数は決して多くないのですが、活動規模は大きなものになっています。これを見ていると、少人数であるから活動の広がりがないというわけではなく、活動する人の熱意などが大切なのだなあと思い起こされます。もっとも、人数がいないと成立しない活動もあるので、彼らがその問題について、どのように乗り越えるのかなと陰ながら心配はしています。

牛島 今のお話、三田の教員として補足させていただきたいんですけど、純粋に教育効果という点でいっても、小ささというのはあんまり気にされなくていいかなという気がします。というのは、例えば私のゼミにアカデミック・スキルズを履修していたり、庄内セミナーに行った学生がたまに入ってきたりするんですけど、ゼミで議論する内容のクオリティは、その1人がいるかないかによって大きく変わります。ゼミは十数人のグループですから、そのゼミの中で、アカデミック・スキルズでの経験とか庄内セミナーに行ったことで発言できることとか、考えていることってあるので、その一言を言うか言わないかで結構違ったりするんですね。

ですから、例えば学部1学年1,000人ですけれども、その1,000人の中に30～40人、何かちょっと違う経験をしている、先生方のプロジェクトに入っていた学生が30～40人いて、その30～40人がうまくばらついてくれば、学生は1つのコミュニティーにしかないわけではないので、別のコミュニティーに行ったときに、それが波及するというプロセスがすごくあると思うんです。なかなか効果の測定は難しいと思うんですけど、早い時期に日吉でやっていただければ、三田は結構変わる可能性が大きいと思います。

種村 どうもありがとうございました。それでは今の話題に限らず、それぞれご質問、ご意見等ありましたら、どうぞお願いいたします。

小佐野 今までのお話にちょっと関係があるかどうか分からないんですが、今日は4つのプロジェクトの方を紹介していただいたと思うんですけども、それぞれ大学と学生と、それから例えば自治体とか、さまざまな関連する第三者がおられると思います。庄内セミナーのところでお話があったんですけど、かかわる第三者というのはすごく短期的な成果と、過大な希望とか、過大な部分を抱えていると思うんですけども。今お話を聞けば、すぐに解決するようなものでもなく、時間をかけてというところだと思うんですけども、過大な希望、短期的なものに対して、どのようにお答えをしたりとか対応されているのかというところを、お聞きしたいんです。

羽田 どこまでお答えできるか分かりませんが、庄内セミナーに関しては、セミナーの運営のための資金、ファンドレイジングに当たる活動の中で、地元経済界の方といろいろ話をさせていただきました。そのとき一番感じるのは、たとえばセミナーが地元の経済活動に短期間にどういう効果をもたらすのか、どのような即効性があるのかということです。しかし、短期的な成果や即効性を求められること自体が、我々の趣旨からするとまったく逆方向の期待ですし、ある意味で見当違いの期待にほかなりません。これに関しては、多少かっこよく言えば、趣旨を優先させて、セミナーの中長期的な効果についてかなり時間をかけてお話をしました。

つまり、目先のセミナーに限らず、教育自体が中長期的な視点に立たない限り最終的な成果というのは期待できません。とすれば、広く教育に対して、あるいは長い目で見えた場合の人財育成に対して、腰を据えた投資を考えていただけないだろうかというようなことは、ずいぶんお話ししました。ただ、実際、最初に打ち合わせに出かけたのは2007年ですが、その時点でも、庄内がかなり経済的に苦しい状況にあることは素人目にもよくわかりましたので、短期的な成果や即効性を求められるというのも理解できました。特に今回の震災の後には状況はま

すます厳しくなっていることも考えられますし、正直なところ、おそらく双方が十分な形で相手の状況や希望を理解して、その上でなお、それじゃあこの辺りだと両者が納得できる落としどころを見出すというようなことは非常に難しいだろうと思います。

それから、我々といいますか、少なくとも私は長年東京に住んできて、いわゆる都会型の生活にすっかり慣れてしまっています。すると、実際に現地に行ったとき、現地の実情を正しく把握するというのはとても難しいものです。そういった点で先ほどお話しした落差というのは、おそらく我々が考えている以上に大きい問題として存在しているのだらうと思います。この辺のところは、もし双方が中長期的なことまで考えていくのであれば、目先のセミナーをどう実施するということは別のレベルでかなりじっくり腰を据えて、話し合いを積み重ねていかなければならない。そのような地に足の着いた機会というものを、本腰を入れて作り上げて行かないと、長い目で見た場合の庄内セミナーのような教養型の活動は、継続がとても難しくなるという印象を持っています。

種村 どうもありがとうございました。今の問題に関連して、港区は短期的な成果を求めているわけでは決してありませんが、自治体からの期待ということと、それから慶應義塾の学生を指導する立場ということとの関係で、何かございませんでしょうか。

坂倉 地域からの過大な期待ということで、最初の問題設定が教育研究型なのか地域貢献型なのかという例があったと思うんですけども、どうしても最初はその二項対立の問題から始まらないといけないなというふうに、私自身も感じています。港区と数年間にわたって事業を行ってきた経験からいうと、これは必ずしも教育か地域貢献かと分けるものではなくて、初めはそういうところから入ったとしても、それが地域と大学の対話を続けることによって、それまでどちらのフィールドにもなかった新しい価値をつくる、新しい教育の場をつくったり、新しい研究が始まったり、新しい地域のつくり方の実際的な方法が見いだされたり、そういうことが本当は重要なのかなと感じています。

芝の家がある程度成功しているものと言っていいとすれば、最初から芝の家のようなことを大学にやってくれと、行政の人が依頼したわけではないわけですね。逆に、私たちとしても行政からの依頼、地域の課題を理解して、こうすればオーケーだと確信を持って企画を提出したわけでもなく、その過程にはお互いの事情をすり合わせていく本当の意味での地域の課題の実際、あるいは研究教育の現場の課題というのをお互いに話し合う。それは結構面倒で大変なのですが、議会が通らないからどうしてくれという話だったり、あるいは行政としてこういうことを狙っているんですと言われても、それじゃあちょっと違うんじゃないかということもあるし、逆に行政側、地域の人から見ても大学に期待することは非常にいろいろあるんですが、それをそのまま言うと全然違うアウトプットが出てきたりして、おっかなくて何も言えないと、そういうことも逆にあります。

最初から互いに全てがマッチすることはないはずなので、いかにお互いにメリットがある事業の在り方を探るか、その対話の時間、あるいはマッチングする場が現状ないと言っていいと思います。これがもう少し時間をかけてつくられていくことによって、もっともっと大きな可能性がそこから出てくるのではないかなというふうに、現在私は感じています。

種村 どうもありがとうございました。それでは、最後に、社会・地域連携室の方からコメントをいただきたい



坂倉 杏介氏

と思います。

宮尾 社会・地域連携室の宮尾と申します。そもそも社会・地域連携室は慶應義塾全体として社会貢献、それから地域連携に組織的、総合的に取り組むための組織として2008年6月、ほぼ今から3年前に発足しました。社会・地域連携に関して義塾内外の関係機関との連携を図る。それと、社会・地域連携にかかわる情報を収集して一元的な集約を行い、それを文化的に発信する等の業務を行うことが求められていますが、実際のところまだその活動が十分でない部分があると思われます。

私自身もこの6月に社会・地域連携室に異動したばかりで、あまり時間がたっていないこともあって、種村先生から求められているようなコメントを、今の時点ではちょっと十分に発することができない状態がありますので、ご容赦いただければと思います。今日先生方の報告を聞いて、これまで教養研究センターが取り組んでこられた社会・地域連携活動の実態を詳細に知ることができましたので、今後の参考にさせていただきたいと思います。

それから、社会・地域連携活動は実際大部分は、主に教員あるいは研究者の方々が担っておられまして、社会・地域連携室としても微力ではありますが、できる限りサポートを行うつもりでおりますので、よろしくお願いいたします。

種村 どうもありがとうございました。教員は非常に勝手なことばかり申し上げる習性がありますので、ちょっとお気を悪くされましたらどうぞご容赦ください。これからも教員の方から、さまざまな要望などが寄せられると思いますが、事務の方々がさまざまな制約の下で活動なさっているということも、一方では分かっております。互いに試行錯誤しながらの中で何かしら双方協力し合えるようなところを模索し、具体的な活動に結び付けていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

それでは、最後に不破所長の方から、ごあいさついただきたいと思います。

不破 今日はお集まりいただきましてありがとうございます。今日はこれまで社会・地域連携を教養研究センターとして行ってきたキャンパス外の活動、そして日吉キャンパスで行ってきた部分をご紹介いただいてあらためて勉強させていただいた思いでございます。日吉に勤めているながら、私もこれほどまでに、本当に各担当の先生方が力強い気持ちを持って、本当に個人を超えたレベルでいろいろなご尽力をいただいていることを知り、頭が下がる思いでいっぱいです。そして学生さんも限られた人数でも、あれほど大きなものを動かしてくださっているという、その何か途方もない人間の力といいますか、慶應に集まっている人々が秘めている力、こういうのがボランティアの力なのかと思うくらい、皆さんの力に頼ってきたことに思いが至りました。今までこのような個人の力に頼る形で行ってきた、こういう社会・地域連携の在り方について、今後どのように大学としてセンターとして行うことができるのか、ということが問われていると思います。

なかなか大学に何を願うというのもむずかしいかもしれません。ただ、資金を出してくださっているという素晴らしい面があるので、資金を出してくださり各キャンパス、教員、学生の自主的に活動に任せるというのも慶應らしく、重要だと思いますが、おそらく今後資金の面でもそう潤沢に自由に活動とはいかないことがあるかもしれません。そこでこれまでの活動を支えてくだ



不破 有理氏

さった方々のお知恵と経験の積み重ねを伺い、交流をすることで、限られたリソースでも進める方向を探っていけたらと思います。今回お話しいただいた中でも、やはり教養研究センターが行うべき活動を改めて客観的に捉えてみると、いわゆるすぐに結果が出るタイプの活動ではないということ、直近のことではなくて本当に深い意味でいろいろな体験を経ることで、人間の力、人間力とでも呼べる「心身の体力」を学生のうちに蓄えて、そのうち力になっていってくればいいという、そのような広い意味での教養力とでもいう人の土台を築いていこうという思いがそれぞれの先生の活動の基本にあるのだと思います。

それに加えて、地域への程度かかわれるのか、地域へ貢献できるのか、という視点はいつも問われるのですが、やはりこれからのセミナーを通しながら、教育への還元と社会貢献のバランスを本日のようなセミナーを通してヒントや提言をいただき考えていきたいと思います。今までのやり方が、もしかすると限界があるのではないかなという心配もあります。やはり個人のボランティアの気持ちだけではなかなか支えきれない、せっかくすばらしい活動をあきらめなくてはいけないということがないように、これまで築いてきたその基盤を、ぜひともお互いを横断するような形で、抱えてきた課題をぜひ大学にも汲み取っていただいて、さまざまな形で教職員ともども、大学ともども、今後の1年間を通して、今後の社会・地域連携について深めていくことができたいと思います。そのために皆様のご協力をこれからお願いする次第です。本日はどうもありがとうございました。

種村 それでは本日は長時間、どうもありがとうございました。次回、このセミナーを10月に、今度はSFCの方々の活動を紹介していただくという趣旨で行いますので、ぜひともこちらにも足をお運びいただければと思います。

慶應義塾大学教養研究センター主催

第一回 社会・地域連携セミナー

大学教育と社会・地域連携のあり方を考える

— 教養研究センターのこれまでの取組の意義と課題 —

2011 年 9 月 30 日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター

代表者 不破有理

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL 045-566-1151 (代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2011 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。